

平成 25 年度 授業づくり拠点校研修会 実践事例

◎ 公開授業指導案

国語科学習指導案

指導者 瀨谷 千秋

1 単元 新聞記事を批評しよう

記事による構成や展開、表現の仕方を比較し、批評する

2 単元構成の意図

学習指導要領	「話すこと・聞くことの領域」A（1）－オ 「読むことの領域」C（1）－ウ 「書くことの領域」B（1）－イ
言語活動	新聞記事から得た情報を比較する。C（2）－ウ 考えたことに基づいて説明や発表をしたり、それを聞いて意見を述べたりする。A（2）－ア

題材名 東京オリンピック招致決定についての新聞記事（2種類）

単元設定の理由

本単元では、東京オリンピック招致決定について伝える二つの新聞記事の構成や展開、表現の仕方を比較し、「何をどのように伝えようとしているか」について意見交換することを通して、文章の構成や展開、表現の仕方に注意しながら読み、その背後にある書き手の意図について批評する能力を身につけさせることをねらいとしている。

これまで、説明的文章の学習においては、段落ごとの内容や段落構成、筆者の主張の読み取りに力点が置かれがちであり、自分自身もそのような指導を繰り返してきた。もちろん、それも、基本的で大切なことであるが、それだけでは、文章の構成や展開、表現の仕方に注意しながら批評的に読む力を育てることは難しい。

説明的な文章には、筆者が伝えたいことがあり、それを読み手に分かりやすく伝えるための工夫（構成・展開・表現）がある。つまり、伝えるための工夫の背後には、何をどう伝えたいかという筆者の意図が存在しているのである。そのような視点を与え、筆者の意図について意見交換させることが文章を批評的に読むことにつながると考える。

教材観

扱う題材は、東京オリンピック招致決定について伝えている二つの新聞記事である。A新聞の記事は、招致決定までの経緯や56年ぶりの開催であること、プレゼンテーションの様子、安倍首相や高円妃久子様の役割、レスリングが残りの競技枠に決まったこと、開

催期間など2020年五輪招致の概要がさまざまな面から述べられている。一方B新聞は、五輪招致成功に至った関係者の努力が中心的に述べられている。そこには、2020年五輪招致決定についての情報を偏りなく客観的に伝えようとしているのか、2020年五輪招致決定に至った理由が「チームジャパンの絆」にあったという「人」に焦点を当てて伝えようとしているのかという書き手の意図の違いが存在する。つまり、二つの文章を比較して批評的に読む場面づくりができる題材である。

また、東京オリンピック招致決定という内容は、生徒が興味を持って読むことができる内容であるとともに、新聞という教材は今後生徒たちにとって活用範囲が広がる可能性が高い教材であると言える。

生徒の実態

平成25年度全国学力学習状況調査において、B3「新聞記事の書き方の特徴を説明したものとして、適切なものを選択する問題」の正答率が61.6%（全国）であり、新聞記事について、見出しなどに書かれている情報を正しくとらえたり、本文の書き方の特徴を理解したりすることに課題が見られた。つまり、「文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと」に、依然として課題があることが明らかとなった。本校3年生の正答率は、全国平均は上まわっているものの、決して十分満足のいく結果ではない。

本校の2年生も、日常的に新聞を読む生徒はほとんどおらず、たまに読むとしても興味のあるスポーツ記事等に限定されている。また、新聞や雑誌を読んだり、テレビの情報番組を見たりする時に、その内容について自らの経験をもとに考えることはあっても、構成や展開、表現の特徴の背後にある伝え手の意図について考えながら、参同したり、批判したりすることはほとんどない。

指導観

溢れる情報に常にさらされている生徒たちが、情報の背後にある伝え手の意図について考えることは、情報化時代を生き、あやふやな情報に流されることもある生徒たちにとって非常に大切なことであり、身につけなければならない力である。そのためにも、目的や意図に応じ文章の内容や表現の仕方に注意して読む能力、広い範囲から情報を集め効果的に活用する能力を身につけさせるとともに、新聞も含め、読書を生活に役立てようとする態度を育てたい。

本単元では、まず、生徒たちに新聞記事の特徴である見出し、リード文、本文、図表や写真などの表現の特徴をとらえさせ、効果的に読む方法について考えさせたい。そのうえで、二つの新聞記事を比較させ、構成・展開・表現の仕方の違いに注目させ、それぞれ何をどのように伝えようとしているのかという作者の意図について考えさせたい。さらに、どちらかの記事を選ばせ、表現や書き手の意図について、長所や短所を挙げさせながら、批評させたい。

3 単元目標

- 新聞記事の構成や展開、表現の仕方に注意してよむことができる。(読むこと)
- 同じ出来事について書かれた二つの新聞記事と比較し、表現と書き手の意図について考えることができる。(読むこと)
- 比較した新聞記事の書き方について批評する200字程度の文章を書くことができる。(書くこと)
- 相手の立場や考えを尊重し、目的に沿って話し合い、互いの発言を検討して自分の考えを広げることができる。(話すこと・聞くこと)

4 指導計画(全5時間)

- 第1次**・・・新聞記事を読み、リードと本文との関係から新聞記事の書き方の特徴をまとめる。
- 第2次** 1時間目・・・同じ出来事について書かれた二つの新聞記事の見出しやリード文を読み比べ、段落ごとに要約する。
2時間目・・・それぞれの記事の内容や構成等と比較し、表現と書き手の意図について考える(本時)
- 第3次**・・・どちらかの記事を選んで、200字程度批評文を書く(条件作文)
- 第4次**・・・各自の批評について意見交換をする。



当日の授業の様子



5 本時案(次ページ)

1 主眼

2020年東京オリンピック招致決定について伝える二つの新聞記事の内容・構成・展開の違いを比較することを通して、表現の背後にある書き手の意図について自分の考えを持つことができる。

2 指導上の留意点

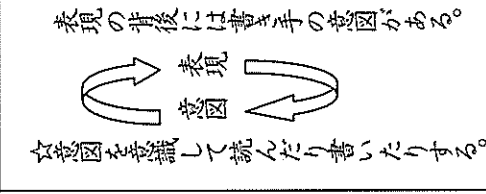
① 共通点や相違点を探す活動では、必要に応じてペア学習や周囲の者と相談する活動を取り入れて、発表しやすい雰囲気づくりをする。内容だけでなく、書き方や分量、印象的な言葉などにも言及できるよう支援する。

② 班での話し合い活動の際は、司会者が話し合いの話題や方向を捉えて的確に話せるように、司会者の役割を確認しておく。また、話し合いでは、まず自分の意見をしっかりと持つこと、さらに、理由をしっかりと説明することができるよう指導する。

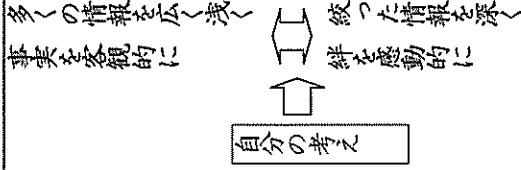
③ 表現の背後にある伝え手の意図に気付かせ、これからの「読み」に生かそうとする態度を身につけさせたい。

評価

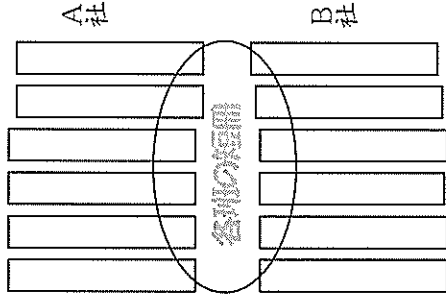
表現の背後にある書き手の意図に気付かせること、これからの「読み」に生かそうとすることができたか。



まとめ



どんなことをどのように



内容・構成・展開等	A社	B社	共通
	A社の特徴	B社の特徴	両方にあるもの

共通点と相違点

二つの新聞記事の共通点と相違点をもとにそれぞれどんなことをどのように書いているのかを比較し、表現の背後にある書き手の意図について考えよう。

めあて

④ 本時のまとめをする。

どんな文章も表現の裏には、伝え手の意図が存在します。それに注意しながら読み、自分の考えを持つことが大切です。

二つの記事の書き方の違いの背後にある書き手の意図について、どちらに賛同するかを選び、その理由を書きましょう。

③ 二つの記事の書き方の違いの背後にある書き手の意図について自分の考えを述べる。

◆ A社とB社の書き方の違いが書き手の意図の違いによるものであることを押さえる。

◆ 班で意見交換をし、まとめたことを短冊に記入し、黒板に貼って説明する。

◆ 班で意見交換をし、まとめたことを短冊に記入し、黒板に貼って説明する。

黒板の表を見ながら、それぞれどんなことをどのように書こうとしているか考え、「〇〇を〜ように」という形で表現しましょう。それについて、班で意見交換し、まとめましょう。

② A新聞とB新聞はそれぞれどんなことをどのように書こうとしているのか、「〇〇を〜ように」という形で表現し、班で意見交換する。

◆ 発表の観点が偏っている場合は、観点を広げられるよう助言する。

◆ 発表の観点が偏っている場合は、観点を広げられるよう助言する。

◆ 前時にまとめた二つの新聞記事の段落ごとの要約をもとに、共通点と相違点を探し、発表しましょう。

本時の流れ

① 本時の学習の見通しを立てる。

◎研究協議会での意見や提案、授業後の考察

1 意見・提案

(1)教材開発について

- ・工夫が見られた。東京オリンピック招致決定という、生徒の興味・関心を引く題材で単元構成されているところがよかった。

(2)課題について

- ・中学校2年生にとっては、難しい課題であったのでは。もう少し、学年の実態に即した課題にする必要があった。
- ・この課題に迫るには、生徒のボキャブラリーが足りなかったのではないか。

(3)課題への迫り方について

- ・表現の型を与えるのは、かえって難しかったのではないか。
- ・～を～ようにとまとめることの危うさがある。
- ・A・Bの新聞に簡潔な見出しをつけてみるという迫り方もあるのではないか。
- ・もっと焦点を絞るほうがよいのでは。
- ・中心課題に対してどのような迫り方をしたらよかったのか。

(4)発問について

- ・「意図」という言葉を使うのではなく、「なぜこんな書きぶりにしたのだろう」という発問にしてもよかったのでは。←→「書きぶり」という言葉が分かりにくかったのではないか。

(5)活用力について

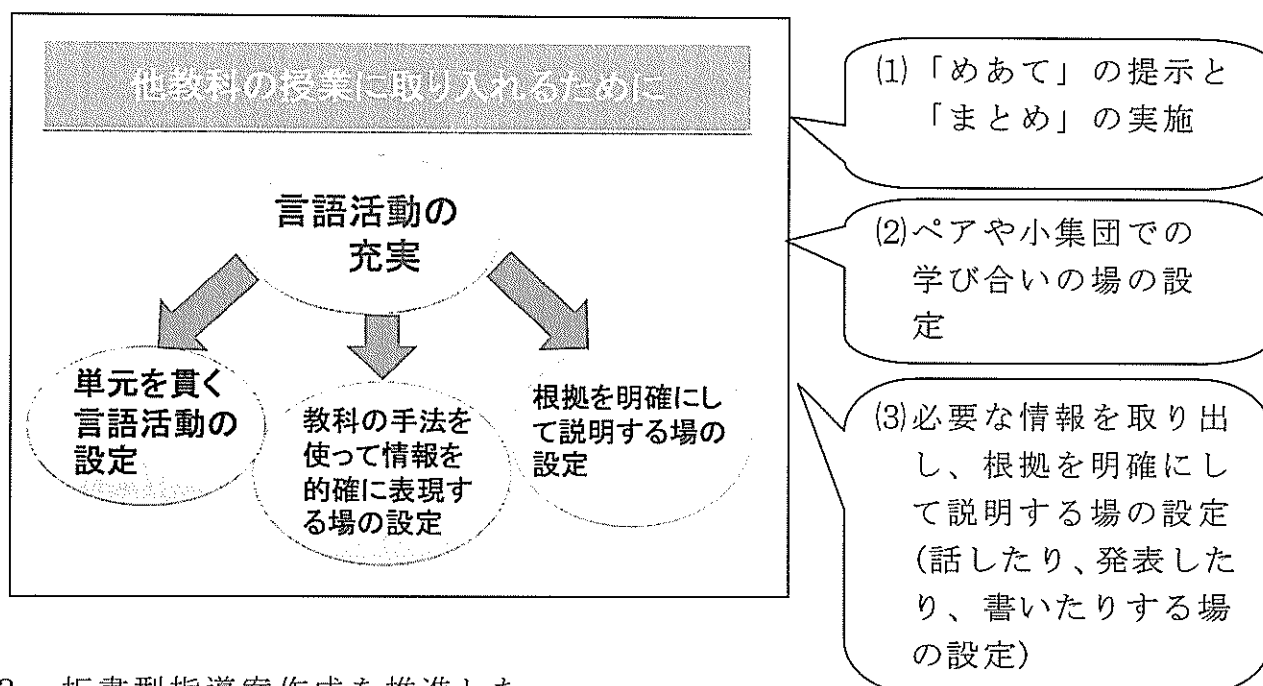
- ・言葉にならない部分を言葉にしていくことが活用力なのではないか。

2 授業後の考察

- (1) 活用力を育む授業では、例えば、この授業での「書き手の意図を捉えるために二つの文を比較する」「新聞全体像を捉えるために短く表現する」のように、何のために、何をどう使っていくのかということを教師が意識して授業をつくる必要がある。それとともに、生徒にもそれを意識させたい。
- (2) 活用力を育むために、単元を貫いた言語活動を設定し、自分の知識・技能を使って課題を解決する授業づくりをこれからも工夫していきたい。そのことを通して、実生活で生きて働く高度な国語の力を身につけさせたい。
- (3) 日々の授業の中で、ポータブルな力（持ち運びできる力）を身につけさせること、それを生徒に意識させることに力を入れたい。そのためにも、授業の見通しと振り返りを習慣化させていきたい。
- (4) 授業とともに、この授業が終わったら、復習をして、予習をしなければならないと生徒が思うような、家庭学習の取組を工夫させたい。授業終わりの振り返り時や終学活時の自学タイムなどで自分で計画して家庭学習ができる工夫をしていきたい。

◎ 学校全体での取組

- 1 研修部と連携した、学力向上のための研修計画、学力向上プランの作成、実施、評価を行った。
 - (1)互見授業の実施・・・1人1授業
 - (2)市・県・教科等での積極的な公開授業引き受け
- 2 活用力向上のための授業づくりのポイントを作成し、全教科で取り組んだ。



- 3 板書型指導案作成を推進した。
 - (1)研修会、活性化訪問等での指導案を板書型で提案
 - (2)各教科のひな型の作成
 - (3)板書のフォーマット作成
- 4 学年体制での計画的な家庭学習の方法の指導と評価を行った。
 - (1)学級担任評価・学年での評価
 - (2)家庭学習の形声的评价(展示会・表彰)
 - (3)課題確認テストの実施
 - (4)やまぐち学習支援プログラム・やまぐちっ子プリントの利用

◎ 終わりに

授業づくり拠点校として、以上のような実践を行ってきた。1年間で授業づくりの方向性についての共通理解が進んできた。ペアや班での学び合いが活発に行われるようになり、それとともに、自分の考えや意見を根拠を明確にして説明できる生徒も増えてきた。2年次には、さらに共同実践を進めるとともに、成果の分析をしていきたい。